フィンランド・デザインの今

1990年代に、世界を襲ったオイル・ショックはフィンランドのガラス産業に大きな打撃を与えました。各ガラス会社は製造方針の変更を余儀なくさせられ、手作業からオートメーションへと移っていきます。その一方、職人技を重視したオブジェ・シリーズを新たに加え、オイヴァ・トイッカ（Oiva　Toikka、1931-　）による「バード」シリーズなどが登場します。現在もオイル・ショックの打撃から立ち上がれていないフィンランドですが、1990年初頭からアールト大学を始め教育機関によって、デザイナーと職人の育成が始まり、企業の枠を超えた活躍が期待されています。その根底にはフィンランドのガラスは高品質であり、時代を超えたデザイン性に優れていることがしっかりと受け継がれています。
様々な苛酷な状況の中で華開いたフィンランド・デザインは、彼らにとって、生活を潤すものであるとともに、復興に立ち向かう信念とそれを担う矜持にみちたものです。それでこそ、その作品は私たちに感動を与えるのだといえましょう。

3

4

5

3 タピオ・ヴィルッカラ（Tapio Wirkkala、1915-1985）
「カンタレッリ（アンズタケ）3280」
■1947年 イッタラ社製　■高：21.0cm
■K・カッコネン氏蔵　■撮影：ティモ・シュルヤネン
タピオ・ヴィルッカラは、ガラスをはじめ、陶器、金属器、照明器具、紙幣、グラフィック・アートなどの多くの分野で活躍しました。その作風は、フィンランドの自然をデザインに取り入れ「木とガラスの詩人」と称されました。この花瓶もフィンランドの森に多く生息するキノコ「カンタレッリ（アンズタケ）」をモティーフとしたものです。

4 カイ・フランク（Kaj Franck、1911-1989）
「ヤマシギKF224」
■1953年 ヌータヤルヴィ社製　■高：6.5cm　■フィンランド国立ガラス美術館蔵　■撮影：ティモ・シュルヤネン
カイ・フランクは1946年からイッタラ社、1950年からはヌータヤルヴィ社でガラス・デザインを手掛けました。ヌータヤルヴィ社はデザイナーの自由な発想のもとに作られたアート作品で有名であり、1990年代まで作り続けました。カイ・フランクはシンプルでデザイン性の高い生活用品とともに、こうした一点物のアート作品でも名を馳せています。

5 オイヴァ・トイッカ（Oiva Toikka、1931-　）
「雷鳥」
■1980年 ヌータヤルヴィ社　■高：11.6cm、10.5cm　■フィンランド国立ガラス美術館蔵　■撮影：ティモ・シュルヤネン
アラビア社で陶器のデザインから始まり、1963年からヌータヤルヴィ社のデザイナーとなりました。カイ・フランクのもとで学びましたが、作風は異なり色彩豊かで心弾む造形が特徴となっています。1971年に始まる「バード」シリーズは500種類以上の鳥が現在に至るまで作り続けられています。この作品は1981年フィンランドガラス産業300周年の記念展覧会のために製作されました。

✦学芸員のおススメコレクション✦

大阪市立東洋陶磁美術館 三彩天王俑（さんさいてんのうよう）

岩座上に立ち、牛を踏みつけ、槍を持つかのようなその姿は、仏教における四天王や十二神将のようですが、実はこれは死者とともに墓に副葬される俑（よう）です。墓室の入口付近に置かれ、墓を守る役目を担っていました。口髭（くちひげ）をたくわえたいかめしい表情、立派な朱雀冠や豪華な甲冑（かっちゅう）など、墓を守るのにふさわしい威厳をそなえています。緑釉や褐釉などの釉薬が施された三彩（さんさい）と呼ばれる技法は、7世紀後半から8世紀初頭を中心に俑や器物などの副葬品にしばしば用いられました。鮮やかな三彩俑にかこまれた墓の中を想像してみるのも楽しいでしょう。

（大阪市立東洋陶磁美術館主任学芸員　小林　仁）

※今回紹介した作品は、東洋陶磁美術館で開催中の特集展「海野信義コレクション　中国古代の俑と明器―墓室を飾ったやきもの」に出品されています。<7/28(日)まで>

三彩天王俑　唐時代・8世紀　高さ89.2cm
大阪市立東洋陶磁美術館蔵
（海野信義氏寄贈）

大阪市立東洋陶磁美術館　所在地 〒530-0005 大阪市北区中之島1-1-26　TEL 06-6223-0055　FAX 06-6223-0057
アクセス 京阪中之島線「なにわ橋」駅下車すぐ、地下鉄御堂筋線・京阪本線「淀屋橋」、地下鉄堺筋線・京阪本線「北浜」各駅から約400m
ホームページ http://www.moco.or.jp